

東日本大震災がスポーツイベントに与えた損害に関する調査

スポーツビジネス研究領域

5011A064-5 原 章展

研究指導教員： 平田 竹男 教授

【序論】

2011年3月11日14時46分頃、東北地方から関東地方にかけてマグニチュード9.0の巨大地震が発生し、未曾有の人的及び物的被害が発生した。日本国内で起きた自然災害で死者・行方不明者の合計が1万人を超えたのは戦後初めてであり、死者数や破壊家屋等の被害は太平洋戦争以来の被害規模である。一方、日本のスポーツにおいては、テレビ、新聞、雑誌等のメディアによって、全国各地の様々なスポーツイベントの中止及び延期が報道されている。

これまでに地震による経済的な損失に関する研究やアスリートによる被災地への継続的支援活動に関する研究はされているものの、大規模地震被害におけるスポーツイベントの中止及び延期の事例研究は十分ではなく、また、スポーツイベントの中止及び延期による損害を明らかにした研究は存在しない。

そこで本研究では、東日本大震災による試合、代表選考会、記録会などを含むスポーツイベントの中止及び延期の事例を整理し、その際にスポーツが被った損害について明らかにすることを目的とした。

【手法】上記の研究目的を達成するため、本研究では、文献及び記事調査、また各競技団体のホームページからの情報収集によって、中止及び延期になったスポーツイベントを明らかにした。また、スポーツイベントが中止及び延期になったことによる経済的損失の算定方法としては、可能な限り昨年以前のデータを収集し、該当競技に関して今年見込まれていた経済効果を推算した。本項で経済的損失を算出した競技は女子プロゴルフ、フィギュアスケート、競馬である。本研究では、各競技について、震災が

なければ本来見込まれていた今年の入場料収入を経済的損失とした。

【結果】

(1)被災地の多くのスタジアム、練習場等に破損が見られた。この影響により、スタジアムでの開催が中止及び延期、開催地を変更してのホームゲームとなるクラブがあった。また、練習場が破損したクラブは、活動休止や他会場での練習等を余儀なくされた。2011年4月30日に日本サッカー協会は地震や津波で被害を受けた全国のサッカー関連施設の修復費用が総額40億円に上るという概算を発表した。

(2)女子プロゴルフでは、4大会中止となったことで強化の面、チケット収入、放映権料収入、スポンサー収入の資金獲得の面、テレビ放送が無くなったために普及の面で損失があった。サッカーはナビスコ杯が、大幅な試合数の減少によりチケット収入、会場内の物販・飲食物の収入の減少が考えられる。日本サッカー協会としても、キリンカップ2試合が中止となったことから、資金獲得、強化の両面における損失があった。また、女子マラソンでは、資金獲得、普及の面での影響だけでなく、代表選考レースを一つに絞りきれないなど強化の面での影響が出た。また、市民マラソンの中止・延期が相次いだため、強化、普及、資金獲得の面で損失があった。このように野球、フィギュアスケート、バレーボール、バスケットボール、競馬、競輪、競艇にも同じように大きな影響があることが分かった。東日本大震災のスポーツへの影響として、スポーツイベントの中止・延期や代表選考が不可能になることによる「強化」の面での影響、テレビ放送の中止や観戦が不可能になることによる「普及」の面での影響、そしてスポ

ンサー収入やチケット収入の減少などによる「資金獲得」の面での影響があった。

(3)東日本大震災の影響で外国人選手の退団が相次いだ。主にJリーグでは5人、プロ野球では3人、bjリーグでは5人の選手が帰国もしくは来日せずに退団した。

(4)スポーツによる被災地支援と復興計画について事例をまとめた。

【考察】東日本大震災はスポーツ界へも様々な影響があったことが明らかとなった。スポーツ界への影響について、トリプルミッションの概念に沿って考察した。

「普及」に関して本研究で取り扱った10種類のスポーツのうち、オフシーズンであった野球を除く9種目が直接的影響を受けていた。テレビ放送の中止や観戦が不可能になることによる「普及」の面での影響があった。しかしながら、震災発生時期は日本の多くのスポーツはオフシーズン、もしくはシーズン終盤でもあり、直接支援に駆けつけることができた選手やチームも多く、被災地の人は支援に来た選手をこれまで以上に応援するようになった。加えて、サッカー男子日本代表のチャリティーマッチやなでしこジャパンのワールドカップ優勝とインタビューでの受け答え、海外クラブのサッカー選手たちからのメッセージ等が発信されたことは、被災地の方々を勇気付けると同時に、スポーツの発信力を活かして被災地以外の人々の意識を被災地に向けることに成功したと考える。これは、スポーツの価値を再認識する機会であり、普及の面での一定の効果といえる。

競技団体、クラブ単位での資金獲得の面では、スポンサー収入やチケット収入の減少などによる「資金獲得」の面での影響があったと考えられる。しかし一方で、スポーツがチャリティーを通して集めた金額も大きかった。また、スポーツ用品メーカーや

スポーツ量販店が義援金だけでなくメーカーの商品を救援物資として送っていた。これらの活動はスポーツが社会に対して果たす役割として責務であり、大変重要なことだと考えられる。

外国人選手の帰国、スポーツイベントの中止・延期や代表選考が不可能になることによる「強化」の面での大きな影響があった。しかし、アスリートたちは被災地の状況を目の当たりにし、これまでよりも更に強い精神力が生まれたことも事実であろう。それは、なでしこジャパンのワールドカップ優勝、ロンドンオリンピックでの日本のメダル獲得数は史上最多であり、継続的に被災地支援を行なっている競輪選手の長塚智広氏は現役生活14年目にして初めてG1レース制覇、2年連続のグランプリレース出場を果たすといった、震災後の国際大会や国内競技の好成績に繋がっていると考えられる。

東日本大震災から間もなく2年経とうとしている。先行き不透明な放射能への恐れ、犠牲者への断ちがたい思い、進まぬ生活再建など大震災が残した爪痕はいまだに消えていない。日本がそういった状況下であるからこそ、スポーツの力による復興支援も重要なものとなる。被災地でのアスリートの支援についての報道は2011年3月をピークに減少の一途をたどっており、現在被災地支援に関する報道を目にすることはほとんどなくなってしまった。スポーツ選手の支援活動が打ち切られたとは言い切れないが、継続性は不明だ。トップアスリートが継続的に支援することで無力感の軽減に繋がるということが長塚(2012)から、示唆されており、アスリートの継続的な支援活動には意義がある。継続的な被災地支援は、社会の一員であるアスリートにとって社会的な責務であると考えられる。この論文を通して、東日本大震災の被害の大きさが伝わり、スポーツの力による復興支援について考える機会となれば幸いである。